【記者からの質問】

〈当初予算案について〉

読売新聞／予算編成に当たって、力を入れた制度や思いを込めた点は？

知事／コロナ対策と災害対応に重点を置き、やるべきことをやった。1 期目はほとんどソフト対策、2 期目になってハードが実装されるようになった。8 年目の予算を考えたとき、デジタル化の時代だからこそ、人の果たすべき役割や価値を見直し、人づくりをポイントに予算化することにした。

読売新聞／昨年に続き、コロナ分を含めると過去最大になった。財政比率はどうなっているのか。

知事／まず、コロナと災害は最優先で予算をつけた。その上で、今後の財政計画を見直した。将来どのぐらい財政的に厳しくなるのかを示す将来負担比率が、本県はいいほうから 4 位。この予算を積み上げると 10 位程度に下がり、再来年がピークで、その後、徐々に抑えられていくという見通しが立ったので、人に投資する予算を組み立てた。

毎日新聞／今年の雨期までに済ませておきたい災害対策は？

知事／できる限りやっていきたいが、間に合うものとそうでないものがある。また、どこまで対策すれば防げるかもわからない。できる限り間に合わせた上で、どの程度の災害に抑えられるか。現実を踏まえながら、次の対策を愚直にやり続けるだけ。

　治水は難しく、抑えるばかりでは農業が成り立たない。上流の皆さんが、お互い支え合おうと田んぼダムにご協力いただくなど、流域の合意形成で水を逃がしていく。

　一方、行政はモニターやビッグデータを使って予知し、声かけをしていく。新しい災害と対応するシステム作りを進めたい。IF プロジェクトをできる限り前倒しして備えたい。

朝日新聞／今回も県債残高を更新するのか。

知事／そうなると思う。数字は後ほど。

朝日新聞／県債残高を更新するにもかかわらず、当初予算額が多い。人への投資とあるが、個人への投資が多い。これは、次の選挙戦を見据えた狙いがあるのか、予算配分なのか。

知事／選挙戦は全く関係ない。人への投資は大事なこと。担い手として、佐賀に来てもらうのも大事。その人たちが、輝いて能力を発揮できることも大事。そして、その業界が輝くよう注力した。

西日本新聞／人材育成は、一朝一夕にはできない。成果指標の方法は？

知事／成果指標は難しい。ただ、人への投資は裏切らないと確信している。必ずや血となり肉となり経験となって、次の佐賀県のためになる。

　もちろん、投資の部分はある。しかし、人づくりはコロナ禍だからこそできる。コロナ禍で使わなかった予算を人に回した方がいいと予算編成を再検討した。

西日本新聞／この 4 年間でやりたいことを全部盛り込めたのか。また、できなかった部分は？

知事／コロナで足踏みしている部分はある。特に海外との流通や観光。その反面、コロナ後の準備ができた。コロナ後に備えておこうという気持ちでいっぱい。

佐賀新聞／積極型の予算だという印象を受けた。2 期目の最後に勝負に打って出た意図を聞かせてほしい。

知事／勝負に打って出たつもりはない。従来、佐賀県は倹約型。事業費補正をしながら、交付税を取ってという形を押さえてやっている。それが、現在の健全財政を支えている。

　ただ、時代が大きく変わっている中、国費を投入しながら事業化をしていく。サンライズパークは、まさにそう。新しい領域にビジネスチャンスが生まれると考え、財政計画を見た上で計画を立てる。今後、将来負担比率が一時悪くなるが、これから借金を返し始めるので数字はよくなる。そう計算した上で、何がやれるか。コロナ禍で動きがない今がチャンス。ハードの整備も含め、基盤整備もやっていく。そして、今まで手がつけられなかった人材支援をしていくことで、倹約型でやってきた佐賀県に効果が出てくる。

　採算が合って、将来の財政の健全化を見据えながら十分できる範囲だと予算化した。